

る。社会統合が進み、広く社会一般に認知されてホームレス運動の裾野が広がっていく一方で、かつては強烈に発せられていたメッセーj性が影を潜めてきているように感じられる。

とはいえ、こうしたメッセーj性の薄まりは避けられないものであり、それを忌避しようとすれば、活動は閉鎖的かつ小規模なものへと萎縮していく。何よりも、当事者の人たちから見放されてしまう。食うことと寝ること、安心して生活することに必死な思いをしている人たちの前で、「ただ社会資源が増えるだけでは意味がない」と頭を振って見たところで、そんなお題目は生活に満ち足りた人たちの間だけでやってくれと呆れられるのがオチだからである。

必要なことは、量的な裾野の広がり、質的な社会変容へと結び付けていくような、少なくともそれをわずかなりとも展望できるような「仕掛け」ではないかと思われる。

仕事の場・出会いの場から 見えてくる再生の道

それは特別な、難しいことではない。たとえば施設職員やカウンセラーとして接したときに「社会不適応」や「就業阻害要因」などと解釈される事柄も、出会い方の違いによっては生きるたくましさやしたたかさ、その背後にある社会批判と受け止めることができる。ふいっと姿を消してしまうような態度

が、徹底的な使い捨て雇用形態の中を渡り歩きながら身につけた、唯一の「明確な」意思表示だったりするのである。

要は出会い方であり、自分自身や社会のあり方を前提としない出会い方を可能にする場所＝空間のつくり方である。炊き出しの空間が単なる食事提供以上の意味を持っていたように、路上であろうとなかろうと、当事者同士や当事者と支援者が出会い、お互いに何かに気づき、それが自分の考え方や生き方に自然と影響を及ぼしていくような場。何の派手さもなく、闘争的でもないこのような場所と空間が生まれ、増殖し、飲み込まれずに生き残り続け、人びとが留まることを受け入れていくこと。それによって、もはや路上に留まることすら許されず、不安定な職場環境・住環境へと「社会復帰」することを求められ、流動と拡散を強いられ、いくホームレスの人びとが再生していく契機が垣間見えるのではないだろうか？ その可能性にすがってのみ、私たちが何とか持ちこたえようとしていくという側面は否定できないけれども……。

では、どのような場所と空間がありうるのか？ ホームレス運動のさまざまな試みの中から、ここでは私自身が関わっている取り組みを一つ紹介する。

〈あうん〉という仕事起こしの取り組みがある（東京荒川区。二〇〇二年八

Wさんは、〈あうん〉のリフォーム事業を引っ張る

棟梁であり、私の師匠である。中学を出てから左官の見習いを8年勤め、その後さまざまな改修（リフォーム）工事に携わってきた彼は、まさに便利屋と呼ぶにふさわしい昔ながらの多能工である。

そんな彼も、ふとしたきっかけで路上に出て、路上で1年半を過ごした。あるとき「このままではいかん」と一念発起した彼は、路上から日雇い仕事に通い続ける。金が入ってもサウナなどには泊まらずに貯め続け、50万を貯めて自力でアパート入居を果たした。しかしその無理がたたって肝炎を発症。3年間で4～5回の入退院を繰り返す中での〈あうん〉参入だった。体さえ健康ならば一般企業で十分にやっていける彼も、いまは当事者たちの仕事起こしという〈あうん〉の趣旨に賛同して、安い賃金で自らの技能を発揮してくれている。

「この器用さだけで生き残ってきた」という彼の職域の広さと仕事への集中力は見事という他なく、リフォーム事業は彼なくして一日も成り立たない状況である。〈あうん〉に関わるまでカナヅチすらまともに持ったことがなかった私も、いまは彼の「手元（手伝い）」として一緒にリフォーム仕事を担い、「何を考えとるんや」と毎度毎度怒られながら、なんとか仕事をこなしている。

賃金の高低が唯一自分の仕事ぶりに対する評価だった職人の世界で生きてきた彼にとって、まともな賃金を支払えない〈あうん〉の現状は、時に耐えがたいものであるに違いない。しかしそれでも私たちを見放さずに仕事をやり遂げてくれる彼のような人が、人びとが「ホームレス」とさげすみ憐れむ人たちののだといったら、それはいい過ぎというものだろうか？



月）。当事者と支援者が同一労働同一賃金の下で一緒に働いて、自分たちの力で生きていく環境を整えていこうという労働者協同組合（ワーカーズ・コレクティブ）的な事業である。主な事業内容は、リサイクルショップの経営と便利屋（引越・片付け・リフォーム）。地域の中に拠点を構えつつ、当事者の技能を活用できる職種を選んだ。発足時には給料ゼロ、店舗の家賃を支払うのが精一杯だったこの試みも、さまざまな能力と技能が結集する中で年商三〇〇〇万を上げ、一〇数名の当事者・支援者が〈あうん〉の仕事